

感性に磨きをかけた学会へ To Be an Institute of Great Sensitivity

監事 吉野秀明



一般社団法人として再スタートし2年が経過した。残念ながら2年連続の赤字決算ではあるが、理事、会員の方々の御尽力により、改善の兆しが見えつつある。3年後の2017年には、学会創立100周年を迎える。次の100年に向けて、井上友二会長の下、本会の改革が着実に進められており、財務タスクフォースによる財務基盤の再構築の検討などに加え、新しい事業戦略の試みも始められている。

本会がこれから100年の新たな道を切り開くための参考になればと思い、少し古いが数年前にベストセラーとなったビジネス書『ハイコンセプト「新しいこと」を考え出す人の時代』（ダニエル・H・ピンク（著）、大前研一（訳）、三笠書房）を紹介したい。著者は、これからの時代を生き抜くには、「個人」として「六つの感性」に磨きをかけることが重要だと説いている。一般社団法人として次に挙げる「六つの感性」を磨き、これからの時代を切り開く学会となることに期待を込めて：

（1）機能だけでなく「デザイン」

機能面を迫ってきた時代から、感性に訴えかけてくるデザインが重視される時代となっている。本会ロードマップ委員会が策定した「2030年/2050年技術ロードマップ」では、ありたい社会像をデザインし、その創造に貢献できる技術目標との対応付けを試みている。引き続き学会として、夢のあるICT社会の未来像をデザインし、積極的に発信して社会に訴えかけていくことが大切であろう。

（2）議論よりは「物語」

まさに、森川総務理事が巻頭言で提案されている「ストーリーを語る学会」である。認知科学者マーク・ターナーによれば「物語は将来を見通し、予測し、計画を立て、説明するために最も大切な方法である」とのことである。素晴らしいストーリーを創出し、それを要約し、分かりやすく世の中に訴えることで、新たな産業や社会の確立に寄与する学会であってほしい。

（3）個別よりも「全体の調和」

ばらばらの断片をつなぎ合わせて新しい全体像を築き上げる資質が重視されている。井上会長は「業際イノベーション」として、ICTが業界横断的な横串機能を担い、この機能の最大活用により新しい産業分野が創出される、と提言されている。工学分野の幅広い専門家が集う本会の特長を生かし、ICTを軸とした新たなシンフォニーが創り出されることを期待したい。

（4）論理ではなく「共感」

相手の立場に立って考えられる能力は、本質的で重要な個人の資質である。真の国際学会として脱皮し、更に発展し続けるためには、何よりも各国からの共感が得られる法人（邦人）になる必要がある。皆が「いいね！」をクリックしてくれる学会でありたいものである。

（5）まじめだけでなく「遊び心」

「遊び」は仕事、ビジネス、個人の幸福を追求する上で重要な位置を占めるようになってきている。財政面の「遊び」は厳しい状況であるが、このようなときこそ「遊び心」を大切に、ワクワク・ドキドキがあふれる、楽しく皆が集う魅力ある学会でありたいと思う。

（6）ものより「生きがい」

経済成長のエンジンがICTであるのと同様、人を動かす「動機」というエンジンは「生きがい」を追求することにある。本会は、これまでの日本の「ものづくり」を支える学会としての役割に加え、高齢者にも若者にも新しい「生きがい」をもたらす存在であってほしい。

次の100年に向けて、一般社団法人として、個人の感性も高める「センス」ある学会に生まれ変わることで、本会に対するQoE（Quality of Experience）が更に高まることを期待したい。